

雜 錄

ゴカイ類

フナ蟲

タウナス

サジツタ(矢蟲)

夜光蟲

ウミシヤボテン

シナブタ(沙喫類)等なり

右の如く其種類の稀少なるは是れ一に余の不才と淺學との然らしむる所なれども其場所採集地として好位置にあらざるに因るなり

噫我熊本縣下のみ動物の種類少なからんや西には有明海を控へ南方には縣下漁業の好地として彼の天草灘を扼し其水遙に延ひて渺茫たる支那海水となる如斯の位置を有し如斯の次第なるは是れ斯學に志すものゝ少數なるに従て採集者の乏しきに因るや必せり噫相州三崎地方のみ動物の種類多くして九州地方のみ少きの理あらんや醒起せよ醒起せよ九州の男兒

● 猥りに外國より鳥獸を輸入するは危険なり

凡う外患を有するは生物の通則にして世に萬物の靈と稱せらるゝ吾人人類と雖も野外に在ては往々猛獸の餌となりて其腹中に葬むられ屋下に安居する時と雖も時としては微菌の爲に侵されて一朝にして斃るゝ事あり况んや助けなき植物や下等の動物の如きは外圍皆敵にして善く其自然の壽命を全ふするものは實に千中二三に過ぎすと云ふも或は過言にあらざるべし、されは目下民間に喧傳する農作物の害虫と稱するものも善く其發生經過の状態を観察する時は一母虫にして數百千の卵子を産するものも云へとも其子にして發育を遂げ産卵するに至るものは極めて少きものなり、夫の浮塵子の如き去る明治三十年に於ては本邦中諸所に繁殖し之が爲めに米産上無慮七千五百萬圓の損害を來せしものも試に田面より稻株を抜き取り函中に移植して浮塵子を放ち飼養するときは往々其數増

加すべきに反て減少する事ありし怪んで善く其稻株を調査するときには葉間に數個の蜘蛛の潜伏する事あるは昆虫飼育をなすものゝ往々經驗する所なり、米國の如きは殊に此等の關係に就きて注意し害虫驅除の方法を講ずると共に其外患たる害敵をも調査し其敵を利用して害虫の増殖を防遏せんとし往々外國より害虫の敵たる鳥獸を輸入し自然の驅除を計りたる事あり然れども一利一害は數の免れざる所乎輸入の當時は善く其目的を達し着々効を奏する事あるも從來其地に無き動物を輸入したるより在來種間の平均を紊り年を経るに従ひ漸く其弊現われ反て後悔したる事實多かりしなり、本邦の如き目下害虫驅除の問題大に農間に喧傳し是等の研究に従事するものも亦々漸く増加し來りたれば自然驅除の方法を講究せんと企圖するものも尠なからざるべければ茲に千八百九十八年米國農務省年報中より著名なる事實を拔萃し讀者に報告する事とし充分の調査を遂すして猥りに外國より鳥獸を輸入せんと企つるものに警戒を加へんとす

「馬」馬は人類の至る處に隨伴するものにして素より吾

人に必用なるは論を俟たされども往々放養したる後非常に繁殖して野生となり却て尠なからざる害をなすに至る事あり濠洲にては野生の馬は大に牧羊場の牧草を食害し米國西部の諸州に於ても亦た大に繁殖しネヴァダ州にては法律を布きて銃殺する事を允許するに至れり

「山羊」セイント、ヘレナは僅々五十平方英里の地積を有する小島にして島中の高山は二千七百英尺に達し十六世紀の始め此島の發見せられたる當時は一面に鬱蒼たる森林を以て蔽われ居たりしも現今にては岩石露出し比較的荒蕪に屬するに至れりこれみな葡國人が千五百十三年に山羊を此島に輸入したるに因し山羊の繁殖は實に非常の速度を以て進み七十五年間に數千頭の多きに達し嫩弱なる喬木又は灌木を食し小樹漸く滅すれば熱帶地方に固有なる暴雨の爲に林中の土壤を流失し山骨露われて森林漸く滅じ已に千七百九年には島司より林木の將に盡きんとする旨を報じ山羊の防禦策を講せん事を本國に稟申せしも其言遂に採用せられさりしかは千八百十年に至り他の島司は山羊の爲めに林木全く跡を絶ち其結果として島廳

に要する薪炭の輸入額は一ヶ年に一萬三千六百弗の多きに達せし旨を報告するに至れり

「猫」 猫は又た吾人の豫想に及ばざる大害をなすものにしてノヴァスコシアの沖合に位するセーブル島にては千八百八十年に於て始めて輸入せられたる後速に繁殖して此島に從來居住せし兎は爲めに全く跡を絶つに至れり

マダガスカル島の北西凡二十英里を距るアルダブラと稱する島にては猫の繁殖の爲に當地固有の鳥にして *Bonobius alabramus* と稱する飛翔せざるクヒナの一種は遂に全く亡滅せりと云ふ

ニュージールランドの東岸より五百英里を距てチャザム島と稱する島嶼の一群あり此島は五十年前始めて殖民し猫、犬、豚を輸入せしに該島に産する五十五種（内十三種は他に産する事を聞かず）の鳥類は漸く其數を減じ就中鳥學者に最も珍重せらるゝクヒナの類にして *Cubalus* 屬の二種中 *C. dieffenbachii* は恐らく已に亡族となり *C. modicus* も將に同一の運命に遭遇すべしと云ふ（續く）

（中川久知）

●タカチホヘビの新産地

高千穂宣麿氏が英彦山に於て明治廿八年七月此蛇を捕獲せられ翌廿九年十一月理科大學動物學教室へ寄贈せられしとは本誌第十卷四四頁に報道せり其以來會田龍雄氏の熊本第五高等學校に赴任せられし當時の來信中にタカチホヘビは熊本近傍にては左程少なきものにあらず當校にも一尺餘りのもの一疋之ありとの通報あり其後横濱のフラン、オーストン氏明治三十年の夏駿州の富士山に於て蒐集せられし爬蟲類兩生類等の標本中に此蛇四頭を保存せられし其大さ等は左表の如し

標品番號	體の全長 (喙端より尾端まで)	尾の長さ (肛門より尾端まで)	腹鱗	下腹鱗
1	四一五 _ミ	七〇 _ミ	一六六 _枚	五〇 _枚
2	同	同	一六九 _枚	同
3	三二〇 _ミ	七六 _ミ	一五五 _枚	六〇 _枚
4	二八〇 _ミ	三二 _ミ	一六四 _枚	四六 _枚

故に此タカチホヘビは九州の特産ならずして本道にも栖息するものなり併し他の蛇類の如く平野に栖息するや否や熊本高等學校の標本は何地にて採集せられしか詳ならず